

広島俳句倶楽部

令和六年二月作品集

萩の寺

あざみ

昨年十一月初旬、三姉妹で大阪の東光院に参拝しました。東光院は萩の寺として親しまれ、大阪では、南の四天王寺、北の東光院と並び称されています。境内には、正岡子規、高浜虚子などの句碑があり、ホワイト・ブツダと呼ばれる釈迦如来白仏像が鎮座しておられます。色とりどりの萩の花は、清楚なもののから近代的な変化のものまで楽しめます。寺を巡ると、健康への不安も薄れて心穏やかになり、元気をもらうことができました。久々に、ここに來られたことを幸せに思いました。

寺町の昼の静寂萩の風

松手入寺にあまたの庭師来て

爽涼やブツダの像に令掌し

萩の寺般若心經子と唱へ

萩の風萩寺で買ふ萩の筆

萩の寺投句箱へと一句入れ

刈る萩を括る手伝ひ参詣者

枯萩の塵を集むる寺の僧

ひらひらと落葉降り来る百度石

小春日の子規の句碑へと足軽く

《作品鑑賞》

ふじ女

作品に誘われて、東光院のHPを開いて見ました。大阪のみどりの百選にも選ばれた、萩のお寺。三姉妹で楽しめたのでしよう。萩の花言葉は、内気、思案、柔軟な精神、だそうです。萩の控えめな美しさのあるお寺に、一度、行ってみたいになりました。

寺町の昼の静寂萩の風

萩は、風が吹くと、はらはらと花が散ってしまうようです。静寂の中にも、何か音を聞いてしまうような句です。

松手入寺にあまたの庭師来て

庭師さんの手仕事。人の手の行き届いたお寺なのでしょう。

枯萩の塵を集むる寺の僧

萩の花言葉には、実は、残酷、というものもあります。花が小さく散りやすくポロポロと落ちてしまうから。お掃除は、大変でしょうね。

小春日の子規の句碑へと足軽く

萩の寺投句箱へと一句入れ、と今回の作品にありました。が、つい投句してしまう気持ち、よくわかります。足も軽くなって良い旅の終わりですね。

涸川に沿うて上つて下るなり

綿虫を払うて上る峠かな

歳晚のと或る祠に佇みぬ

一灯に降る雪のある嬉しさよ

紙鳶揚がつてをりぬ廢寺跡

一軒の家や冬田に囲まれて

冬の田を渡る風けふ強きかな

疫を病みて蒲団の中の心地よき

咀嚼せり冬の雨音聞きながら

けさ焼きしばかりの畔を帰りけり

佐保光俊

町望む丘の頂上冬夕焼

縄跳の競争をする姉妹かな

残業に出さるるホットチョコレート

寒月を斑な雲の流れたる

夜半の雨上がる冬曉星明し

寒月の残れる朝に鴉鳴く

冬木立枝に一葉の残りたる

冬を越す蛹雨戸に見つけたり

春泥に踏み込んで荷を届けたり

春の月辺り赤らめ昇りけり

村上正人

初時雨電車の窓を打ちにけり

鴨鳴いてしづかに瀬戸の波寄する

人のみな見上げてゐるたる冬桜

友が居て友の子が居て大晦日

お降りの社への坂上りたる

初参かそけき雨を袖に受け

初御籤残りの銭をみな使ひ

白みくる川面に鴨の影あまた

大川やゆるやかに鴨流されて

もぐりては浮かぶにほどり見守りぬ

高尾ひとみ

音立てて落葉を踏める家路かな

縁側の日の差す端に悴む手

寒き夜を獣の声に目覚めたり

野水仙ほのかに匂ふ上り坂

紅梅におだやかとなり里の風

一羽二羽と飛び立ち梅の花散らす

石鹸玉すぐ側にきて弾けけり

春霞出航の銅鑼ひびきけり

春の川大曲りして海に出る

籠り居の部屋にジャスミン香りをり

あざみ

歳晚や一等賞の新潟米

年末の挨拶医師と交はしたり

指揮棒の鋭く振られ年の暮

鯖缶も夕餉の一つ四日かな

子とふたり遅めの昼餉五日かな

絆創膏手の指に貼る七日かな

初春やバツハ聞きつつ物を書く

風花に空をしばらく見てをりぬ

募金して演奏を聴く寒土用

温室の真ん中の木を見上げたる

亜矢

小春日や近江ことばの義仲寺に

風邪の子を抱きて強き母となる

欄干も川辺の街も凍てにけり

餅花のもと金婚の父母よ

常連が臘梅を活け定食屋

小忙しき吾を過ぎゆく小雪かな

餅雪や棚田一枚一枚に

祖父去りし世に小糠雨あたたかし

ゆたかなる祖父の百年花菜風

春眠や時をり古書の匂ひたり

綾乃

山茶花の咲き継ぐ道を帰りけり

枯山のトンネルを抜け街明り

絶え間なく冬の港の小波かな

白鷺の冬の川原をひた歩く

二日の陽いささか子らのしをらしく

病窓に街の音聞き松七日

味噌搗いて呉れたる友の恙無き

冬薔薇のくれなるを見る日暮前

冬日入り天井白き母の部屋

母の喉ゆつくり動き苺食ぶ

眼帯を外して見入る冬椿

日脚伸ぶ遠出の日ある予定表

雪のひまケンケンパーで通り過ぐ

白梅や新築の家に灯がともり

梅早し小さくなりし吾子の靴

梅咲いてしばらく見えぬ瀬戸の島

スコップで流れを作る梅の前

水飲めばサドルに一つ梅の散る

春の鴨日毎に岸に近くなり

春の日や少し濃いめの茶となりぬ

山茶花の溢れ咲く道散歩する

雪の朝足跡つけて出勤す

寒椿枝の先より咲き始む

水仙と黄水仙とが咲きにけり

断捨離のつと手の止まる春時雨

露の莖頭の先を見つけたり

春めいて空高く舞ふ鶯かな

庭のそこ此処に球根芽吹ききたる

山登り振り向いて見る春の瀬戸

それぞれに老いたる人の長閑なり

井藤希

栄吉

大畑恵

冬薔薇の雪に朝の日の差して

節分の遅き湯に聞く雨の音

二二月の枝整ふる鉄の音

遠き嶺雨にけぶりて春浅し

小糠雨宮居の杜の梅早し

池の端の茶室賑ふ梅日和

潮騒や椿の道はここに尽き

料峭や荒磯に海星あまた居て

初蝶のまた参道を横切りぬ

高台の古き団地に猫の恋

暁子

臘梅の家まで上り下りけり

悴みてコーヒー豆を挽きにけり

母が家で標直す男かな

雪下しの塊子らの滑り台

残雪に木屑落として鴉立つ

雪解水道の轍を流れゆく

山家かな淡雪の降る夜となりて

草の芽の出づる道端里に着く

梅見ればハローと声を掛けらるる

春の鳥一閃残す庭を見る

すみれ

故郷の山茶花の枝持ち帰る

玄関の壺に山茶花投げ入るる

峡の畑仲間と囲むのつべ汁

風邪治り久方振りに母と会ふ

母が家へ向かふ途中のとんどかな

お茶会の前に見てゐる寒牡丹

冬牡丹茶会の薄茶飲み干せり

冬の梅一区画だけ咲いてをり

冬の梅薔の中の花一輪

松の内母の居ぬ家静かなり

ちどり

踏み入れば鳥の飛び立つ冬の庭

かいつむり浮かびて群となりけり

風に乗り風に巻かれて雪の降る

手の平にすぐ消ゆる雪受けてをり

水仙のあちこちに向き風を受く

和菓子屋の硝子戸越しの枝垂梅

いつまでも手を振る母や梅二月

山頂へ道譲り合ひ匂鳥

洗ひたるシート敷らむ春の風

日のあたる庭に植ゑ替へ桜草

知佳子

冬空の一環として安芸小富士

鴨の群川の流れに逆らはず

次々に尻立てる鴨夕茜

日向ぼこ老いたる身にも伸びる爪

婿に注ぐ鰯酒の火を消しにけり

雪吊や奥の院まで杖を突き

臘梅の花の光や夕間暮れ

春隣おもちやの様な犬通る

紅梅の額に代はりて蕎麦湯かな

御浸しの予定の花菜瓶に挿す

辻純江

果物に釣らるる小鳥かわいくて

善哉を作つておいて餅を待つ

餅搗の音に思はず手拍子す

清らかに目覚め早速雑煮かな

忘れゐて久しき紅を初鏡

炬燵なく炬燵の寛ぎ懐かしむ

風除けに入りし店で獅子大根

雑炊の胃に沁みゆける朝餉かな

冬籠の夫の机に花を挿す

立春の光を受けて出かけたり

雲雀

海岸に動かぬ船と余寒かな

早春の空き地に歌とギターかな

春の船コインを揺れる手に渡す

春時雨乗るはずだった新幹線

春浅し置きつ放しの手紙かな

ベルが鳴る玄関バレンタインの日

空港は吹雪のフリップクロック

電光の遅延の赤き春の旅

撮れたかと上から梅園の庭師

掛け声の体操梅林の親子

その場所は目のよく当たり返り花

雪催母の生家を訪ねれば

雪催祖母の家まであと少し

着ぶくれて親子三人浜に出る

寒鴉塀に帰る夕日かな

冬の月そこまで行けば近づくか

明け方の悪夢敷毛布の振れ

白川郷寒九の雨に訪ねたる

花付きはそれぞれ里の寒紅梅

立春の風のほどよく吹きにけり

山茶花の散り乱れたる山路かな

巣立跡露はとなりて冬木立

また一つ芥の流れ冬の川

冬の虹洗濯物を取りに出て

徘徊の兄と見てをり寒苗

凍雲や余震に町の孤立なほ

バス停まり窓の高さに辛夷の芽

猫柳掠めて下る高瀬舟

蹲踞に二つ浮かせて藪椿

晩酌に一夜干したる細魚かな

ふじ女

松田裕子

森口良樹

天守閣見ゆる社に豆を打つ

姉妹で並んで投げる追儼豆

鬼やらひ癒はここぞと豆を打つ

探梅や瀬音辿れば獣道

よべの雨に土の匂へる春田かな

雨粒をつけたまま伸び花菜かな

傘を置き青菜摘みをり菜種梅雨

馴染み客と値引きの話植木市

つばくらめ島に一つの保育園

山野ウタ

堀越しの南天の実のたわわなり

楽しみは初場所を見る夕べかな

日記帳大寒の文字囲みたり

冬の空デートボールの玉速し

冬の日にはと膨らむ布団かな

初めての四国巡りや菅の笠

須美れい

美術館出て風花にふれにけり

風花や夫の着物を解きをり

凍て空のびりの走者へ大拍手

梅ふふむ写真の夫は垂れ目氣味

梅の香に目覚むる朝やバースデイ

北窓を開けばふつと匂の浮かび

高梨英子

貂の来て畑の肥料握り起こす

初雪の朝静かなり窓の外

元日のハンドル握る二子線

雪雲や遮断機の灯の点滅す

スーパ―の横の車に積もる雪

生姜湯の生姜の沈む読書かな

土肥律子

片付かぬ瓦礫に雪の降り積もる

日を受けて雪間広がる棚田かな

点々と目ごとに増ゆる雪間かな

街路樹に来る鳥あまた春兆す

名園の芝の焼けゆく池の端

大原良子

街の音聞いてゐるなり春の昼

太々と鯉の浮き来る春の庭

手を引いて梅の盛りを歩きをり

梅の香を纏ひて門を出でにけり

二月の川二月月の空映す

桑門わかこ

校庭のフェンス鳴らして春一番

春時雨列車は西へ走りゆく

いにしへの歌人を思ふ梅見かな

境内の枝垂梅散る雨に散る

古雛の細き眼の微笑みて

撫子

薄雪の軒下通る猫の居り

霞棚引き瀬戸の山いくつ見ゆ

春霞汽笛の音の聞こえ来る

友と見る土手の桜のまだ固し

はんのりと紅くなり薔薇の芽の先

美耶

水鳥の今日は浅瀬で並びたり

鶯の声聞こえたり桂浜

春めくやひとり飲み干すカルバドス

上島康子

早春の潮満ちてゐる安芸小富士

卓上に食べかけのパン受験生

新しき櫛で髪梳く雛の日

熊谷ゆり子

セーターの一枚選び猫に着せ

走り去る道着の子達息白し

ベランダで風花ふはつと手に受くる

みさ子

本開きすぐにうとうと春近し

ばつさりと散髪をして春めけり

春めくや新譜を買つて帰る道

山崎桂子

泣く吾子を轎に乗せ行く朝かな

春光や畦に二つの車椅子

高嶋 彌代

令和六年一月度作品集より

すみれ 私の選んだ十句

冬の山いくつ連なる大路かな
母眠る部屋を出づれば霜夜なり
鳥来よとペランダに置く寒の水
寒いですねと言葉交す寺の道
びしょ濡れの制服を干す真冬かな
日の当たるカーテン越しに冬の蠅
ありたけの寝具並べて年の夜
終点のバス停で降り梅探る
子が発ちし庭に臘梅咲きにけり
赤き実を付けければ拍手雪兎

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
あざみ
亜矢
栄吉
暁子
知佳子
雲雀
高梨英子

辻純江 私の選んだ十句

寒禽や大路は海を遠ざかり
胼^{へん}菜^{さい}右手に^へすり込む左手かな
遠くからとんどの灰の降り来たる
補聴器をつけぬ一日や冬椿
冬の雨障子の内に聞いてをり
雪雲の懸かる遠嶺の奥が郷
風の糸全部伸ばして走りけり
失恋の歌だったのか寒の入
寒の月人の少なき電車ゆく
冬晴や犬の駆け出すフリスビー

佐保光俊
村上正人
あざみ
栄吉
大畑恵
すみれ
ちどり
ふじ女
桑門わかこ
高梨英子